【調査報告】

大阪市帝塚山古墳の測量調査

岸本直文　森　オリ江
江角　啓　金谷健一
向田一成　奥村宏美

一　はじめに

帝塚山古墳は大阪市住吉区帝塚山西二丁目に所在する前方後円墳である。大阪市域の古墳は、市街化の進行とともにかなりの数が失われたとみられ、大阪の古墳時代を考える上で大きな障害となっている。しかし、江戸時代以降の地誌類や絵図、古い地籍図や地形図、塚のつく地名などによる復元の努力がなされ、[1] また平野区長原地域のように発掘調査により埋没古墳の確認も進められ、徐々に情報が増えてきている。今後、こうした成果や、残された古墳の調査研究を総合して、大阪市の古墳時代像をより豊かなものとする必要がある。

現存する古墳としては、今回報告する住吉区の帝塚山古墳、生野区の御勝山古墳、天王寺区の「茶臼山古墳」が、大阪市を代表とする大型の前方後円墳としてよく知られている。このうち「茶臼山古墳」は古墳かどうか判然とせず、古墳であったとしても徹底的に改変を受けており、[2] 御勝山古墳は前方部を失い後円部の損傷も大きい。[3] そのなかで、全長約一〇〇mの前方後円墳である帝塚山古墳は、旧状を比較的よく残しており、一九六三年に国の史跡に指定されている。

帝塚山古墳は住吉大社の北一kmあまりの位置にあり、古墳時代に国家的な港として栄えたとされる住吉津に近く、上町台地の西縁に築造された姿は、大阪湾を意識して築造されたことを示している。現在では海はかなり遠ざかっているが、当時は台地のすぐ西に海岸線が迫っていた。現在でも、低い西側の市街地から眺めると、南北に通る標高一〇数mの上町台地が立ち上がり、その上に築造された高さ約九mの帝塚山古墳は、市街地のなかの緑地ということもあり、非常によく目立つ存在である。[4]

しかしながら、本墳については、昭和のはじめに略図が作成され[5]て以降、墳丘について詳しく調査されることもなく、また採集された埴輪も乏しく、堀田啓一氏の研究をのぞいて、本格的な調査研究がなされてこなかった。そこで、墳形や墳丘規模についての基礎データを得て、帝塚山古墳の概要を明らかにすることを目的として、二〇〇〇（平成一二）年度に測量調査を実施したものである。

（岸本）

二　帝塚山古墳の位置とこれまでの調査研究

帝塚山古墳は上町台地の南端に位置する[8]（図1）。上町台地は、住吉から大阪城付近まで長さ約一二kmにわたって南北にのびる、高さ一〇～二〇mの洪積台地である。難波宮跡のある法円坂一帯が最も高く標高約二三mで、南に行くにしたがい低くなり、天王寺付近で約一五m、住吉では約一〇mとなる。東西幅はおよそ二～二・五kmで、台地の東側は緩やかに傾斜し河内平野に接するが、西側は比高五～一五mの急な崖となっている。

今から約六〇〇〇年前頃の「縄文海進」の時期には、海面は現在より数m高く、海岸線は河内平野に深く入り、上町台地はこの河内湾と大阪湾をさえぎる半島となった。その後の堆積活動によって河内湾は徐々に狭まり、一方で大阪湾側では沿岸流によって沿岸洲が北へと発達し、河内湾が塞がれていく。古墳時代に入る頃には、上町台地北側の砂州（長柄砂州）は北岸に届くほどに伸び、これによって塞がれた淀川の流れが、やがて砂州を切断し大阪湾に流れ出すようになっていたと考えられている。

五世紀頃の上町台地西側は、台地下に海浜部がわずかに広がり海岸線となっていたようである。[9]したがって、台地西縁に位置する帝塚山古墳は、海上からもきわめて近接した位置に仰ぎ見ることができたと思われる。住吉津からも至近の距離である。住吉津の位置については、上町台地と我孫子台地を分ける細江川（細井川）の河口部、住吉大社のあたりに想定されている。また、我孫子台地の南には現在大和川があるが、江戸時代の大和川付け替え以前にも、もともと東南から台地を切って流れる河川があり、その河口部、現在の遠里小野町付近に住吉の榎津とよばれる港があったらしい。[10]（森）

帝塚山古墳は、摂津の山々から泉州の海岸一帯まで大阪湾一帯を広く望むことのできる景勝地として、古くから名所となっていたらしい。一七三四（享保一九）年の『五畿内志』に、「大玉手塚と小玉手塚はともに住吉村玉出の岡の上にあり」とあるのがもっとも古い記録である。その後の地誌類などについては別表にまとめた。[11]これらによると、かつて大小二つの帝塚山が存在し、帝塚山古墳の南に別の古墳があったことは確かなようであるが、[12]失われた古墳を北とするもの（『大阪府全誌』）や、位置関係を東西とし記載に混乱が認められるもの（『大阪府史跡名勝天然紀念物』第五冊）もあり、理解が困難である。

帝塚山古墳の考古学的な検討は、梅原末治によるものが最初であり、大阪府史蹟名勝天然紀念物の調査として一九三〇・三一（昭和五・六）年度に測量調査を実施している。この報告において、縮尺五〇〇分の一の図が示され、墳丘の概略や葺石・埴輪の存在、また周濠について言及がなされた。[13]この報告が長らく帝塚山古墳に関する唯一の材料となってきた。その後、帝塚山古墳についてのまとまった検討としては、一九八七年の堀田啓一氏による「帝塚山古墳とその周辺」がある。堀田氏は、このなかで、立地や周辺の古墳、また古記録類を整理し、さ

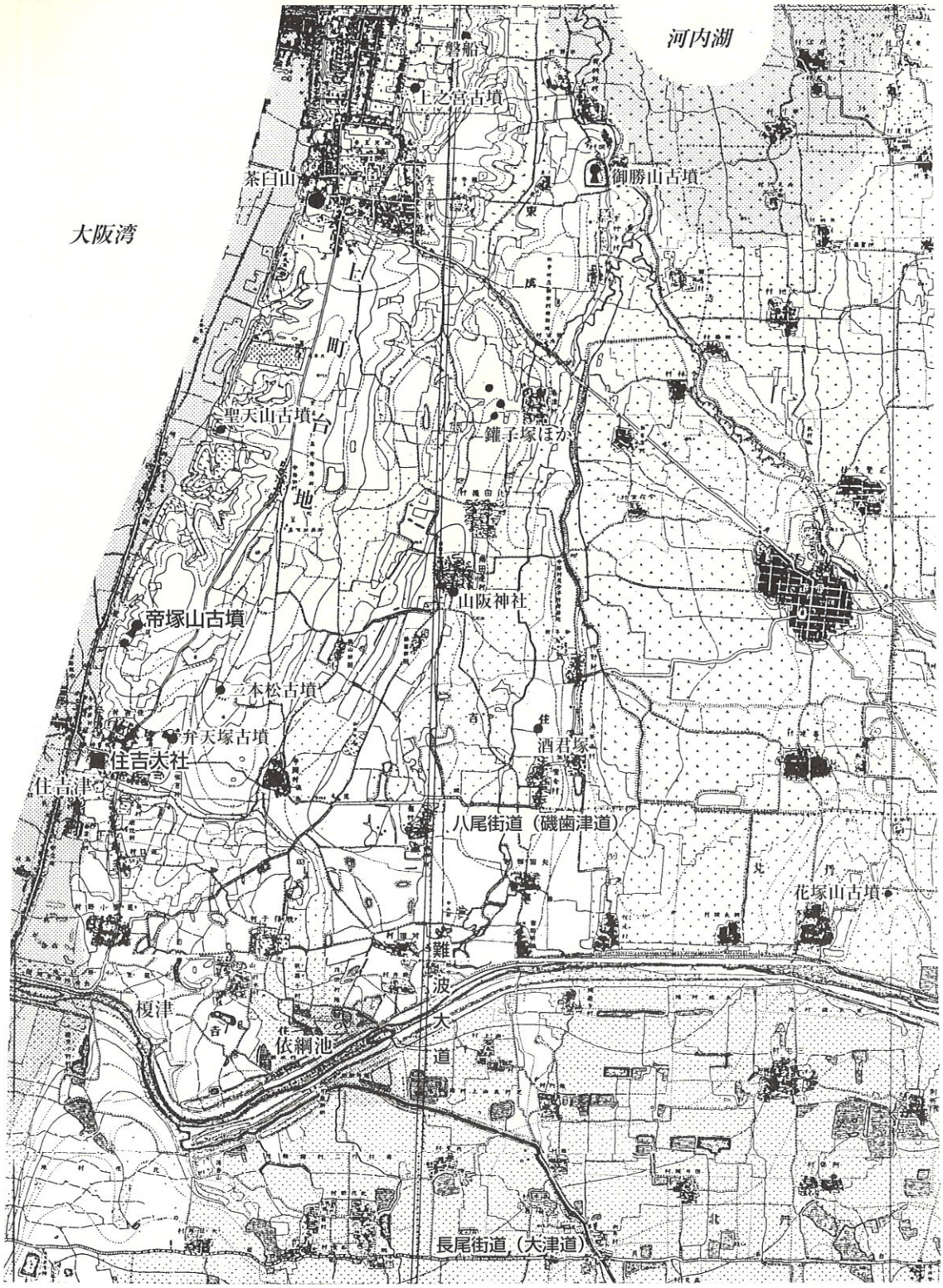


図１　帝塚山古墳の位置と上町台地一帯の古墳分布　1／25000

帝塚山古墳に関する文献

■1734（享保19）『摂津志』（関祖衡編『日本輿地通志』畿内部摂津国）
「大玉手冢　小玉手冢　倶在住吉村玉出岡上　因地名墓」

■1794（寛政６）『住吉名所圖會』　復刻版（1972年）

■1798（寛政10）『攝津名所圖會』巻之一（137・138頁）　復刻版（古典籍刊行会、1975年）
「鷲住王塚　住吉より五町許り北、街道の東にあり。大伴金村塚　同所にあり。土人此両塚を帝塚山といふ。又手支山とも呼んで、」（後略）

■暁鐘成『摂津名所図会大成』巻之七（12頁）　復刻版（柳原書店、1976年）
「帝塚山」（前略）「先板攝津名所圖會にハ鷲住王塚大伴金村塚なり云、是ハ何を以って證とせしや不審按ずるに、此塚をいにしへより二塚とおもひ違ひたり。北の方高く南の方へ長くつづきて一段低し、是まさしく一塚にして、いにしへの山陵の形なり。」（後略）

■『東摂陵墓図誌』
「大玉手塚　直径５間５分、周囲146間５分、立木なし、或曰帝塚山又手支山。小玉手塚　直径１間、周囲48間立木なし」（『東成郡住吉村誌』による）

■1900吉田東伍『大日本地名辞書　第２巻　上方』
「久保之取舵尾云、住吉村北なる岸のひたひに塚の侍るを世に手塚又帝塚といふ、」（中略）「今は其南なる大手塚は黄土よろしきにより土人に崩され、小手塚のみ残る、」（後略）

■1922『東成郡誌』（1684頁）　復刻版』（名著出版、1972年）
「或は又〔　〕曰、」（前略）「、帝塚山とは是なり。帝塚山の南一壟を隔てて又小塊土あり、今之れを小帝塚山と称し、之れに対して其の大きなるを大帝塚山と称す。」（中略）「一墳の大小の事、古書に載する所と前述の現状とは全く相転倒せり。今の小なるは古の大なりしものにて、今の大なるは古小なりしなり。今の小なるは年　所の経るの久しき、その積土の?り取られたりし為、古の小なりしものより遥かに小なるに至りしぞ憂たてき。此の両古墳は今や名勝地として辛うじて官有地に編入せられてあり、稍体を失はずと謂ふべし。（中略）聊々大帝塚（今の小なるもの）の四周は故松本重太郎氏の所有にして、地は住吉村小字天地堂に属し、凡そ１町３反５畝。小帝塚（今の大なるもの）の四周は岡田與八氏の私有同村小字帝塚の地にして、凡そ６反３畝の広袤あり。両古墳の間は広海二三郎氏同じく小字帝塚の地７反４畝を有せり。試みに其の丘邊に立ちて地勢を相るに故松本氏の私有地の劃内に存したる古墳（大伴金村）は今や其の旧形を彷彿すべくもあらず、但し古墳の基地たる天地堂の地盤は、隆窪凹凸一様ならざる此のあたりの地形に似ず、坦々たる堅土たるを失わずして、当年築墳の基地たりしは復た疑ふべからざるなり。岡田氏私有地の劃内に存する古墳（狭手彦）は今も尚儼然たる古墳墓の式制を備え、前方後円の車塚式にて、」（後略）

■1922井上正雄『大阪府全誌』（59頁）
「塚は大小二個にして、南の大帝塚は広袤３反４畝４歩を有し、明治31年11月陸軍特別大演習に際し、先帝陛下御蹕馬あらせられ、一基の大演習碑を建設せらる。北なる小帝塚は広袤僅に４畝12歩に充たざる小丘にして、同上大演習に際し、同天皇御登臨あらせ給へり。」（中略）「又或はいふ、大帝塚はもと小帝塚にして、小帝塚はもと大帝塚なりしが、大帝塚は黄土にして諸種の作物に適せるを以て、里民其の土を運び去りしより漸次縮小して終に反対の状を呈し、」（後略）

■1927『住吉村誌』（301・302頁）
（前略）「尚ほ小帝塚の南なる平地（もとの大帝塚の基地なるべし）は周囲に松の林あり平垣にして、小運動場として頗る好適の地なれば、春秋の交には市内の小学校等の、運動会等を此の空地に催す者多し。」

■1931『大阪府史蹟名勝天然紀念物』第５冊（83・84頁）
「大帝塚山　住吉町の西北、紀州街道の東側にありて帝塚山の西に隣す、大帝塚と称するも、現今は全然山形を残さず、平坦なる芝原に樹木の点々として存するのみ、周囲には繞らすに生垣をもってす。広袤３反４畝４歩に及ぶと、東側に将に崩壊せんとす一亭あり、明治31年11月の陸軍大演習の際、陛下御昼餐の所とす。側に一基の大演習紀念碑あり。」（中略）「帝塚山（小手支山）　住吉町の西北、紀州街道の東側にあり、周回48間面積４畝12歩あり。其形状前方後円に近き一小芝山に過ぎずと雖も」（中略）「明治31年11月陸軍大演習の際明治天皇御登臨あらせられしをもって頂上に一大碑を建つ。」（後略）

■1932『大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第３輯
「以上述べた帝塚山古墳にはまた一個の墳壟の付随したものがあって、それに小帝塚山なる名称が与へられている。位置は帝塚山の正面すなわち西南にあって、相去ること約２丁である。所在地は前者よりも一段高く、同じく松林のうちに墳丘が見られ、また前方後円形を取っている。尤も規模は小さく周囲削られ等して見栄えのしないものながら、主軸は北西から東南方向を取って、北西が前方部と解せられる。現在封土の前後の長さ約90尺、後円の径約40尺、同部の高さ約８尺あり前方部の北側に濠址かとも思われる窪地を伴っている。」

■1933梅原忠治郎「帝塚山古墳」『上方』36号

写真１　昭和３年の帝塚山古墳（大阪市指定文化財計画調整局許可済）

らに古墳隣接地の調査をふまえて墳丘の復元案を示し、築造時期については五世紀前半と考えている。[14]

一九六三年に国の史跡となった[15]帝塚山古墳については、これまで発掘調査は行われていないが、一九八〇年代から、隣接地における開発行為にともなう試掘調査を含めた発掘調査が相次ぐようになる。一九八一年には後円部東側の道路において配水管整備にともなう調査が実施され[16]（ＴＺ八〇―一）、続いて前方部東南隅付近の調査[17]（ＴＺ八六―二）や後円部北側の墳裾付近の調査（ＴＺ九五―二）が行われている。このほか、試掘調査の件数はかなりの数に上っている。調査により出土した埴輪は少ないが、その特徴から、前期末から中期初頭の築造と位置づけられている。[19]

なお、『新修大阪市史』の編纂にあたって、周囲の地籍図を検討した上田宏範・前田豊邦両氏によって、帝塚山古墳の東側により大きな前方後円墳を推定する説が提起されている。[20]いま南海本線が通り、帝塚山学院がある一帯である。明治の地籍図によると、帝塚山古墳が字「帝塚」に所在するのに対して、その東側に「大帝塚」という字名があり、その輪郭が前方部を北に向けた前方後円墳の周濠痕跡ではないかというものである。「大帝塚」という字名は無視できず、大きな古墳がかつて存在したことは十分に考えられ、先にふれた大小の帝塚山の比定もさらに難しくなる。しかし、地籍図の形を見る限り、前方後円形の墳丘部分に相当する地境はなく、『新修大阪市史』に図示されたように復元する根拠は乏しいように思われる。[21]

（奥村）

三　調査の概要

今回の調査は、大阪市教育委員会の指導のもと、大阪市立大学文学部日本史研究室の考古学調査研究活動として実施した。また一部期間については「考古学実習」履修生の野外実習の場とした。調査実施にあたり、土地所有者である（財）住吉村常磐会にご快諾を賜り、大阪府教育委員会・大阪市教育委員会・（財）大阪市文化財協会のご支援をいただいき、また東京都立大学人文学部史学科考古学研究室には測量機材借用の便宜を図っていただいた。

今回の調査は、春頃から構想をもっており大阪市教育委員会と相談を始め、九月頃には、樹木の葉がある程度落ち下草も少なくなる秋が深まった段階での実施に向けて動くこととした。一〇月はじめには所有者のご了解をいただき、具体的な計画を立案し、近傍の基準点・水準点の確認などの準備期間を経て、一〇月末に基準点測量を実施し、一一月から一二月はじめにかけて休日を中心として平板による測量調査を行った。調査を実施した期日は左記の通りである。

基準点測量・測量杭打設　一〇月二八・二九日

平板測量　一一月一三・一七日、一八～二〇日、二三日、二五～二七日、一二月二・三日　のべ一一日

補足調査　二〇〇一（平成一三）年二月二三日

前方部に国土地理院の三等三角点「帝塚山」があり（基準点コード五一三五―七三―四九〇一、明治三六年設置）、これを基準点とし（一九九二年改測成果）、後視点として大阪市一級公共水準点「住吉団地」（三一一―一、一九九三年成果）を利用し、国土座標第Ⅵ系に位置づけた。水準値は帝塚山学院に設置された大阪市の水準点「南二五（Ⅱ）」の成果（一九九九年）を使用した。なお街路部については、縮尺五〇〇分の一の大阪市道路現況平面図（図幅二〇―九、一九七三年測図、一九九三年道路部のみ修正）を利用し、等高線を加える補足調査を行った。原図は縮尺一〇〇分の一、等高線は二五cm間隔である。

期間中は、授業の関係や降雨により半日あまりの日もあり、またおおむね二班が編成できたが、参加者が少なく一班の日もあった。実質的な作業時間を算出すると、一班を単位として、のべ一四三・七時間（昼休み・休憩時間を含む）であり、一日八時間に換算して一八日、二班で九日という能率であった。平板測量は参加学生全員がはじめてであり、最初の頃は据え方などを練習しながらの実施であり、なかば以降は習熟し能率はかなり向上した。参加者は左記の通りである。

岸本　直文（大阪市立大学文学部助教授）

玉井　康晴　森　オリ江　上野　聡　伊勢　可奈子　伊藤　敏之

江角　啓　金谷　健一　坂口　由紀　信貴　由香里　曳田　和

檜山　未帆　向田　一成　奥村　宏美（以上、日本史コース学生）

落合　毅（世界史コース学生）　佐柳　八千代（地理学コース学生）

また、小浜成（大阪府教育委員会）、平井和彦（大阪市立大学考古学研究

会OB）の参加をえた。また南秀雄・高井健司（（財）大阪市文化財協会）両氏には、現地で適切な指導を受けた。

今回の調査の実施から報告をまとめるまでの間に、丸山陽二（（財）住吉村常盤会）、伊藤純（大阪市教育委員会）、永島暉臣慎・京嶋覚・森毅・杉本厚典（（財）大阪市文化財協会）、小野昭・澤田秀実（東京都立大学）、波々伯部守（帝塚山学院）、前田豊邦（大阪市史編纂室）の各位、および関係機関に多大な協力と御教示をいただいた。記して謝意を表する次第である。

（岸本）

四　墳丘の現状

概況　帝塚山古墳は上町台地の西縁に位置し、前方部を西南に向けて築造されている。周囲は住宅地となり、墳丘は昭和四〇年に完成したコンクリートの柵塀によって囲まれ、通常は立ち入ることができない。内部に入ると、戦後の植樹により多様な樹木があるが、（財）住吉村常盤会による日常管理がなされ、繁茂している部分もあるが、よく墳丘を観察することができる。とくに墳頂部は高木はなく開けている。昭和はじめの測量図と比べると、削り込まれひとまわり小さくなっている部分もあるが、全体としては前方後円墳の形状をよくとどめている。現状の墳裾部は崖状となっており、とくに後円部北側は高い法面をなし、高さ約二mのコンクリート擁壁を設けている。

立地と周濠　明治の仮製二万分一の地形図（図1）に見られるように、古墳は台地縁部がやや東に入り込んだ谷地に面して立地する。古墳の東方は平坦な台地頂部であるが、すぐ西方は台地縁部の下り勾配となっており、東北がもっとも高く、西南へ低くなっている。現状の裾部でも、後円部の東がほぼ標高一四m、西側縁で一三m、もっとも低い前方部西南隅部で一二mとなっている。今回、古墳の周囲の路面についても測量を行い、これと大阪市道路現況平面図に記入されている宅地部分などの標高から、周囲の微地形を復元した（図5）。[24] 盛土造成や地下げは当然あろうが、周囲の旧地形をおおよそ反映しているであろう。これによると、前方部前面から墳丘東側に回りこむ谷地形が認められ、周濠の名残と思われる。昭和はじめの測量図には、後円部東側に段差をともなって残る低い地形が記入され、また前方部前面では、「正面には墳麓から約七十二三尺の間一段低い畑地となって、それが南方につづ」くと記されている。この低い部分に相当する区画は、地籍図や一九二八（昭和三）年の空中写真[25]（写真1）でも明瞭に認められ、その南端は現在も細い路地として残っている。また後円部の北側にも、現在の東西道路を谷筋とする谷地形が東へ入り込んでいる状況が認められ、これも周濠の痕跡であると思われる。

後円部　墳頂は径約二〇mの広い平坦面をなし、やや南に偏した位置に、一辺約一〇mで高さ約〇・五mの方形土壇があり石碑が建つ。これは明治三六年に建立されたものであるが、この時の造作については不明ながら、墳頂平坦面に接する斜面上部はかなりの急傾斜であることから、墳頂部は削平して拡張されたようであり、現状の平坦面は

当初の広さではない。墳頂縁辺の埴輪列は周囲に押し出されたとみられ、斜面部には埴輪片が多く認められ、底部片も二点採集している。現在の最高点は、方形土壇の石碑東側の標高二一・九八mであり、現状の後円部西裾部からの高さは約九mである。

墳丘斜面の状況は、上部が急斜面で、標高一九mあたりから緩やかになり、平坦な部分や緩斜面の部分をはさんで裾部の崖面となる。斜面上部は等高線が円弧状をなすが、下半部は場所によって状況は異なっている。裾部は多角形状となり、円弧状をなすのは東側のみである。本来の斜面を比較的とどめていると考えられるのは、両くびれ部に近い部分と東半部である。西側から北側にかけては、広範囲にわたって墳丘上部が流出し、下方に流出土の堆積とみられる緩傾斜ができている。また、門扉からの登り口部分をはじめ、西側や南側には崖状の大きな崩壊箇所もある。テラス面を推測させる平坦面はほとんど認められないが、東側の標高一七m付近はひとつの候補となる。北側では、階段の下で緩斜面に移行するが、その標高は約一八mである。改変を受けながらも段築裾部を反映している可能性もあろう。

なお、東北側には平坦な方形部分があり、昭和はじめの測量図にも現れている張り出しの基部であるが、その成因は不明である。

くびれ部　くびれ部の状況がよく遺存しているのは東側で、比較的明瞭に屈曲を見せる。これに対し西側では、前方部側辺のテラス面がくびれ部で消失するように、流土堆積が多いようであり、後円部から前方部にかけての等高線は明瞭な屈曲を見せずにつながっている。

後円部の墳頂から前方部へと下る斜道部分は、墳頂平坦面の拡張、階段の敷設およびその両側の抉り込みにより、本来の状態はほとんどわからない。斜道を降りると前方部頂の平坦面となるが、もっとも低いのは階段下から数mほど先端寄りの地点で、標高一九・三〇mである。後円部の最高点からは約二・七m下っている。

前方部　前方部は後円部に比べて良好に遺存しており、とくに頂部の平坦面と西側斜面はよく残っている。

まず頂部は、先端に向かってわずかに高くなる平坦な上面をよくとどめ、先端にやや乱れがあるものの、側面は明瞭な肩部をなして墳丘斜面と画される。後円部の推定中心点から前方部頂の先端までは、長さ約四八mを測る。平坦面の幅は、後円部側の基部で四～五m、先端部では復元的に考えて八m程度であろう。前方部の最高点は標高一九・九二mである。ただし、その位置は後円部に寄った地点であり、前面の等高線が乱れている点も考慮すれば、前方部頂の先端部はいくぶん削平されていると判断できる。もっとも、その程度は軽微なものであり、先端部分が大きく高まっていたとは考えがたい。また前方部埋葬にともなう土壇もなかったとみてよいだろう。現状の前方部の最高点の数値でいうと、後円部の最高点からは約二m低く、また前方部頂平坦面のもっとも低い地点からは約〇・六m高い。

西側斜面の裾部近くには、標高一四～一四・五m付近に明瞭な平坦面があり、本来のテラス面と考えられる。その上部の高さ四～五mの斜面は、一様な傾斜をなしほとんど乱れがない。これに対して東側は、

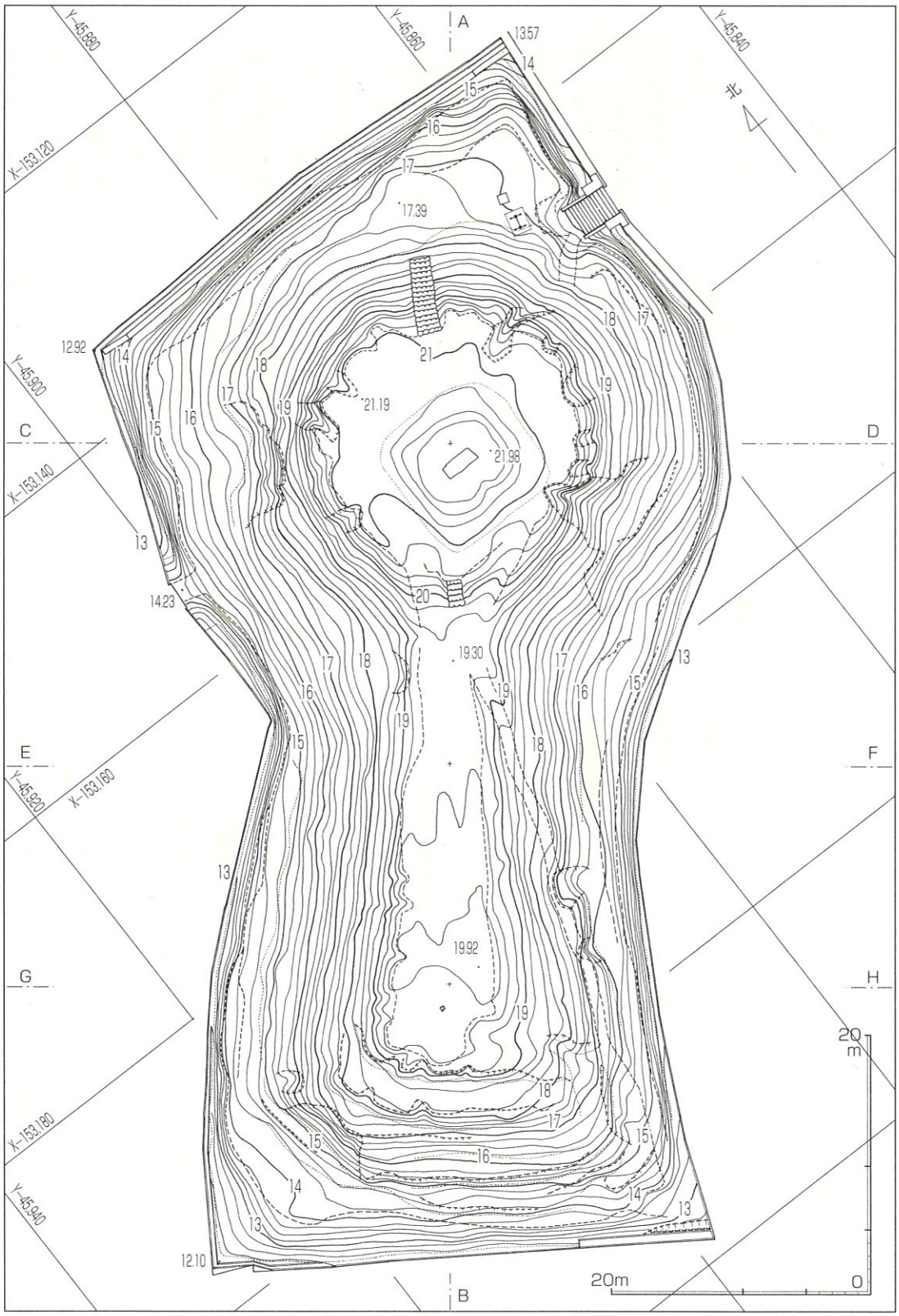


図２　帝塚山古墳の墳丘測量図　１／500

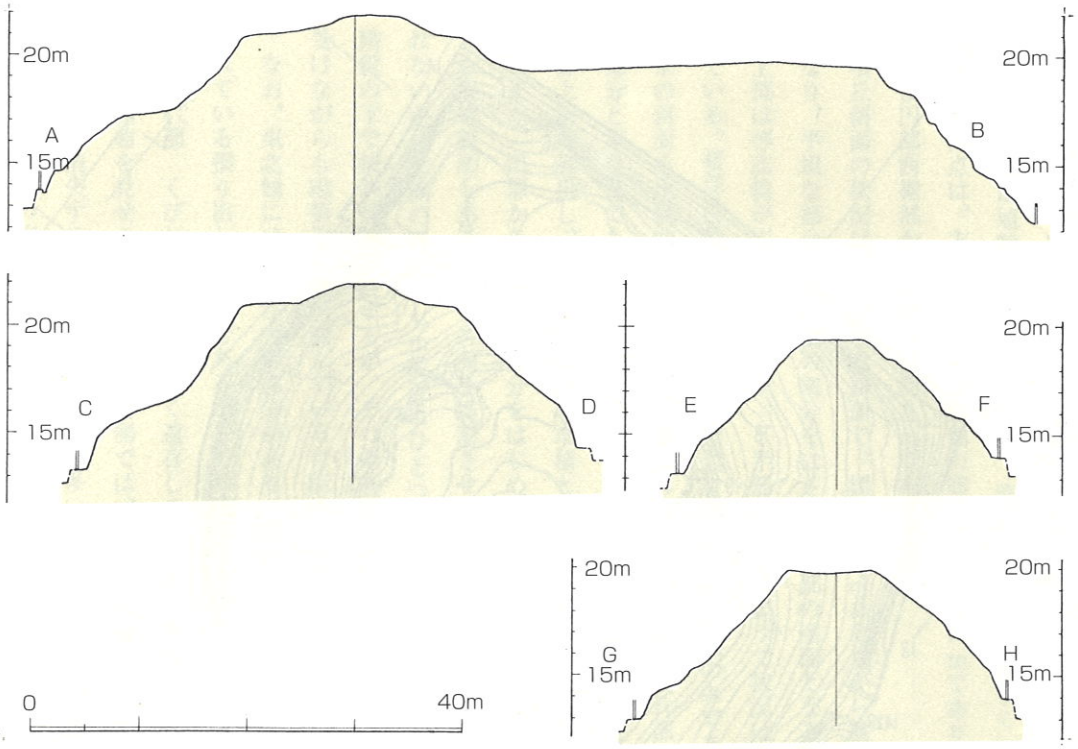


図3　墳丘断面図　1/700　高さは水平距離の2倍

里道が通っていたこともあり乱れている。標高一六mあたりに平坦な部分があり、くびれ部付近から二〇mあまり続き、西側のテラス面に対応する可能性がある。ただし、西側のテラス面に比べると、やや内側に入り込む位置で、高さも一～二m高い。

前面部分は改変を受けて、五面の平坦面ないし緩斜面が認められる。西辺のテラス面からの接続を考えると、標高一四・五mあたりの緩斜面は、西側から続くテラス面に相当する可能性が高い。隅部の稜線は両側ともに改変を受けてはっきりしない。とくに西側では大きく崖状に削り込まれている。

なお、昭和はじめの報告によれば、前方部西側の稜線付近で埋設位置をとどめる円筒埴輪が観察されており、その位置は崖状地形の上あたりになる。この位置が正しいとすれば、前方部西側で見られるテラス面の上位に、さらに一面のテラス面を考えなければならない。前方部前面の標高一七mあたりの平坦面を想定するとすれば、後円部東側の緩傾斜部などもこれに対応する可能性があろう。ただし、良好に遺存する前方部西側斜面には、これに相当する平坦部は認められない。

その他　墳丘斜面に葺かれた葺石は、とくに西側裾部の崖の断面に顕著に認められる。また後円部の斜面上半部などでは、小円礫がかなり目立ち、そのなかには白色円礫も含まれている。墳頂部は礫敷きであったのかもしれない。埴輪については、綿密に探索しておらず、測量作業に際して目についたもので、完全に土中から遊離したものを採集するにとどめた。

（江角）

五　埴輪

採集した埴輪片は三〇点弱である。内訳は形象埴輪片二点、朝顔形埴輪三点、円筒埴輪ほかの底部五点、円筒胴部一四点、その他小片である。これに、帝塚山学院に保管されていた円筒埴輪片一点（25）、（財）大阪市文化財協会提供[27]の円筒埴輪片二点（8・22）をあわせて、新資料として報告する。

形象埴輪（1・2）　1・2は板状の破片で片面に線刻のある形象埴輪片である。それぞれ部位は不明であるが、1は線刻を縦位に、2は端部の辺を横位にして図示した。1はタテハケののち、櫛状工具の先端を押し当ててキザミ目を入れ、ここに剥離して形状不明ながら別の粘土帯を貼り付けていたようであり、さらにこの粘土帯と直交方向に篦で平行する直線を描いている。篦描きの線刻は二本は確実である。2は、ヨコハケ調整の後に、端部に平行する直線、およびその内部に弧線と直線の線刻を刻んでいる。文様構成は明らかでないが、盾形埴輪の可能性が高い。ともに焼成は良好であり、厚さは一・一～一・二㎜である。採集地点は後円部北側の墳頂直下で、墳頂部に据え置かれていた形象埴輪の破片であろう。

朝顔形埴輪（3～5）　5は壺胴部から頸部に移行する部位で、器壁も突帯も厚いつくりである。3・4は形状や傾きから、朝顔形埴輪の口頸部としておく。3は器壁薄くタガも細身で突出度が大きいもので、外面の上半は剥離しているが上面が擬口縁状であり、屈曲してさらに上方へのびる。4は口頸部の突帯部分であるが、粘土接合痕からは、頸部を一度外に折り曲げ気味に整えているようであり、その上に口縁部を加えたのち、薄い粘土を巻いて突帯を成形している。

底部（20～24）　厚さにはばらつきがあるが、おおむね薄いつくりである。いずれも外面は一次調整のタテハケが残るが、内面の調整には二種あり、タテケズリによる21と24は厚さ一㎝まで（〇・七、〇・九㎝）の薄い仕上がりであり、タテハケによる20と22は厚さ一㎝以上（一・〇、一・四㎝）となっている。21はとくに薄い。内面タテケズリのものは、倒立させて削り上げたようであり、最後に底部周辺を横にヘラケズリして整えている。

二点について底部径を復元すると、22が四〇㎝弱、24が二〇数㎝となる。いずれも残存率は一〇数％程度であり、正確さは求めがたいが、一定の目安になろう。突帯まで残る破片はないが、24については、最上部に突帯貼り付け時のナデともみられる痕跡があり、残存する高さがほぼ最下段に相当するようである。

以上のものと大きく異なるのが23である。径一八㎝の底部片で、外面は板を当てたような平らな面をなし、内面には指オサエの凹凸があるが平滑に仕上がっており、ハケメやケズリなどの調整痕が内外面とも見られない。また、かなり硬質に焼き上がっている。通常の円筒埴輪の底部ではなく、形象埴輪の基部である可能性があろう。

胴部（6～19）　筒状の胴部片のうち、突帯の残るものは8点であ

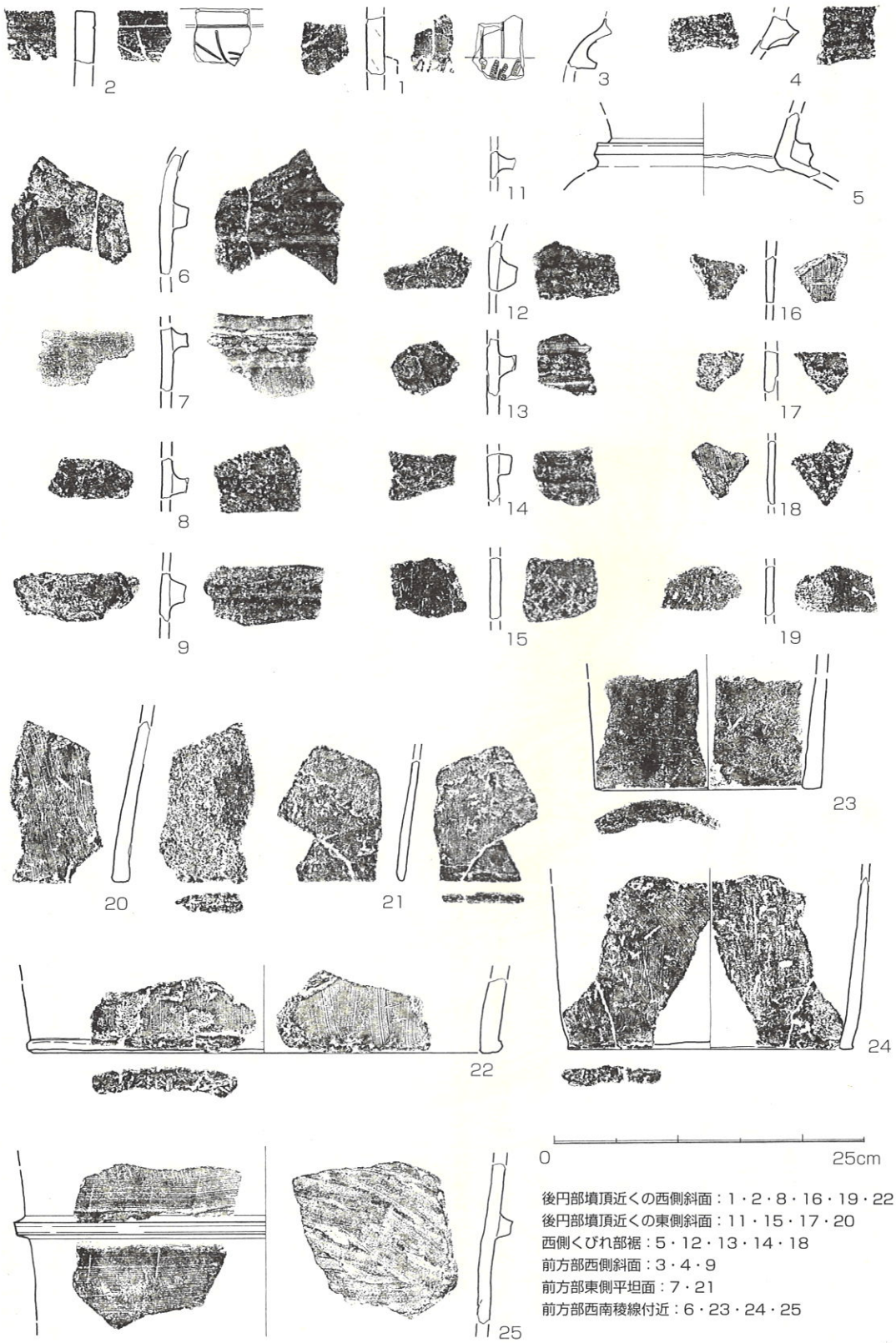
る。突帯の形状は多様であり、突帯幅が広く断面長方形に近いもの（6・14）、断面台形のもの（9・12・13）、幅が狭く幅より高く突出するもの（7・8）、突帯幅がとくに狭く高く突出するもの（11）、などがある。とくに7は、非常に硬質に焼き上がったものであるが、突帯の上面・下面とも強くナデており、端部を上下に高くつまみ上げている。

6は突帯から上の部分が外反気味にのびるもので、このまま口縁部となる可能性が高い。調整においても、外面では突帯より下にはタテハケが見えるが、突帯の上には器面の残る範囲はヨコナデのみであり、内面についてもヨコナデであり、口縁部付近のヨコナデ調整と考えられる。この破片には外面に赤色顔料が認められる。赤く塗られた埴輪は、今回採集したものではこの一点だけである。なお、12も部位は小さいが、突帯から上の部分がやや外反気味にのびるもので、もっとも上位の突帯で、口縁部に近いものかもしれない。なお、今回採集した資料において口縁部の破片はなく、また過去に公表されている資料にもなく、残念ながら、円筒埴輪の口縁部の形状は不明である。16の外面には横方向の二本の線刻がある。二本一組の施文具によるものらしい。形象埴輪に見られた線刻と比べて、きわめて細く浅いものである。偶発的なものでなく意図したもののように思われるが、絵画や記号になるものではないだろう。

6以外では、突帯の残る破片で調整がわかるものは少ない。外面では7のタテハケ、内面では7・8のヨコナデ、14のヨコケズリが認められる程度である。突帯のないものでは、外面はやはりタテハケであり（15・16・17・19）、内面ではタテケズリが多く（15・16・19）、一点のみタテハケが認められる（18）。

器壁の厚さは、大まかに三つに分かれる。もっとも多いのは厚さ〇・八～〇・九cmであり、これより薄い〇・六～〇・七cmのものも少なからずあり（8・9・11・18・19）、一・一cmほどのものが一点（17）である。焼成はおおむねよく、色調は橙褐色のものがほとんどで、焼きが堅緻なものでは表面は暗い褐色となっている。黒斑のあるものは認められない。なお、口縁部の破片がないのと同じく、透孔についても、これまでの採集品にわかるものがない。

帝塚山学院資料　以上の資料とまったく異なる特徴をもつのが25である。これは、帝塚山学院の生徒が以前に採集し、同学院で保管されてきた円筒埴輪片である。採集場所は前方部西側の稜線付近であるという。外面にはいわゆるB種ヨコハケ仕上げの二次調整が施され、内面は斜めの荒いナデ調整である。色調も明るい淡褐色を示し、まったく異なっている。芯の部分はごく薄い青白色で、黒斑はなく、間違いなく窖窯焼成の製品である。B種ヨコハケの細分にあてはめれば、残存部の状況からは、ハケメ原体がほぼ一段分の幅をもち一段分の二次調整を一周で果たしたものと推測され、静止痕はやや斜めであるが大きく傾くものではなく、Bc種に相当するものであろう。静止痕の間隔は、三・五～五・五cmである。突帯は断面台形で稜は明瞭であり、上縁をつまみ上げている。復元径は約四〇cm（残存率10%）、



後円部墳頂近くの西側斜面：1・2・8・16・19・22
後円部墳頂近くの東側斜面：11・15・17・20
西側くびれ部裾：5・12・13・14・18
前方部西側斜面：3・4・9
前方部東側平坦面：7・21
前方部西南稜線付近：6・23・24・25

図4　帝塚山古墳の埴輪　1/5（1・2のみ1/4）

厚さは一・一～一・三cmである。

まとめ　これまでのところ断片的な資料しかなかった帝塚山古墳の埴輪について、なお口縁部や透孔など不明な点もあるが、ある程度、その特徴を明らかにすることができた。概して薄手で褐色に焼き上がり、外面はタテハケの一次調整のみで、内面調整としてはケズリやタテハケが認められた。突帯は断面台形のもの、長方形のものとともに、突出度の大きいものもある。黒斑はない。これまで、帝塚山古墳の埴輪については、前期末から中期前葉との位置づけがなされてきたが、それは薄手のものが多く突出度の大きい突帯をもつことなどによるものと思われる。しかしながら、黒斑のあるものは認められず、焼成はおおむねよく、なかには堅緻に焼き上がったものもあり、窖窯焼成によるものである可能性が高い。B種ヨコハケの資料については、それが一点のみであることが気になるが、共伴資料と考えざるをえないだろう。この資料は窖窯の製品であり、ヨコハケの特徴からは、中期中頃に位置づけられるものである。

（向田）

六　墳丘の復元

ここでは、今回の測量結果に加えて、周囲の地盤や発掘調査の成果にもとづき、墳丘の復元を試みる。

周濠　墳丘の現状の項でもふれたように、現在の路面の標高などから、周囲の地形を推定した。北側と南側に、西に張り出す段丘の凸部があり、その間のやや東側に谷地形が入り込んでいる部分に古墳は立地している。後円部の東北側がもっとも高いが、そこに向かう後円部の北側および前方部前面から東側にかけて谷地形が入り込んでおり、周濠を反映している可能性が高い。

また、一九二八（昭和三）年撮影の空中写真を見ると、古墳の東側は、A—BとC—D—Eで画される西南から東北の方向にのびる細長い地割りが認められる。A—Bと墳丘の間は草木が繁茂しているようで暗く、一段低いのかどうかは判然としない。一方、A—BとC—D—Eで画される東側は、明らかにC—D—Eの東南が高く、段差をもって西北に落ちている様子がうかがえる。これは現況の道路の標高にも反映している。また、その段差もD—Eの部分で大きく、C—Dで小さくなっているようだ。（財）大阪市文化財協会のTZ八〇—一次の調査によると、No.8で周濠かとされる西への落ち込みが認められ、西隣のNo.7では地表下一・七mでも地山に達せず、一方、西側のNo.6では地山が高くなっていることから、No.6と7の間にNo.8に対応する肩部が推定されている。昭和はじめの報告で周濠の痕跡と認めている略図に表現された後円部東側の円弧の位置は、図面をおよそ重ねてみるとNo.7地点のあたりと考えられ、No.8地点の発掘結果とは整合しない。いずれにせよ、No.7ないしNo.8の付近が周濠の肩とすれば、それは一九二八年の空中写真に見える地境のA地点に対応するのであろう。しかし、B地点は前方部の東隅部にあたり、A—Bがそのまま周濠を反映しているのではないようである。前方部前面ではE—Fの地

図５　帝塚山古墳一帯の微地形と発掘調査地点　１/１200

割りが周濠の南肩にあたるとみられ、またA—Bの外側のC—D—Eの段差も無視できない。とくにD—E間では段差が大きいことを考慮すれば、周濠の平面形は、おおよそA—D—E—Fを結んだ形状と推定するのが妥当であろう。これは微地形とも整合する結果である。

ただし、周濠とよんではきたが、同一水面の盾形周濠のようなものではない。水性堆積層も認められず滞水もなかったようである。実態としては、墳丘盛土のための採土による窪地であり、東側および南北側では台地を掘り込んではいるが、底面は地形に応じて西に下降し、西側に開いていた可能性が高い。周辺の試掘調査によると、ほとんどの場合、地山の確認面は現況地盤から数一〇cm程度で、深くても一m未満であり、深い濠が埋没している様子はない。のちの堆積は大きくなく、昭和のはじめ頃までの姿が、本来の形状に近かったと考えられる。TZ八〇—一次調査の深い落ち込みはそれとは様相が異なるもので、別の遺構である可能性があろう。

墳丘　右記したように、周囲に深い周濠を想定するのは不適当であり、多少の埋没や宅地化による削り込みはあるものの、本来の墳丘が現況よりも著しく大きくなるとは考えがたく、墳丘長は一〇〇mを越えないと思われる。

その上で、段築を含めて本来の墳丘を考える上でテラス面の位置が手がかりとなるが、残念ながら現状では確実にテラス面と考えられるものは少ない。これまで帝塚山古墳については二段築成とされてきた。実際、前方部の両側辺にテラス面と考えられる平坦面があり、後円部についても改変を受けているが、大きくは急傾斜の上部と緩斜面の下部からなり、こうした点から二段築成とみられてきたのである。しかしながら、昭和はじめの報告によると、前方部西側の稜線沿いにおいて、据えられた状態とされる埴輪一個体が墳丘上半部の中腹で観察されており、これが確かであるとすると、この位置にテラス面を考えざるをえない。だとすれば、現状の上半部はさらに一面のテラスによって区切られた中段・上段の二段分であり、墳丘は三段築成ということになる。ただし、もっとも斜面の残りがよい前方部西側斜面において、現状では上位のテラス面となるような明瞭な平坦部は見いだせない。しかし、後円部でもっとも本来の斜面が残っているとみられる東側では、現状の裾部崖面の上に等高線が比較的粗な緩斜面部があり、この部分の標高は一七mあたりで、上位のテラス面の候補となりうる。また、北側の階段下の平坦面が、改変を受けながらも本来のテラス面を拡張する形で反映している可能性もある。前方部前面は、現状では多数の崖と平坦面で構成されるが、これに対応させうる標高一七mあたりの平坦面がある。以上のことから、梅原末治による昭和はじめの所見を尊重し、上位のテラス面を想定することとし、三段築成に復元する案を提起したい。

なお、前方部の東側側面の平坦面については、西側のものよりもやや高く内側に寄った位置にある。傾斜地に立地することから、左右対称でないことも十分に考えられ、これを西側下段テラス面に対応するものとみることもできる。しかし一方で、昭和はじめの図と対応させ

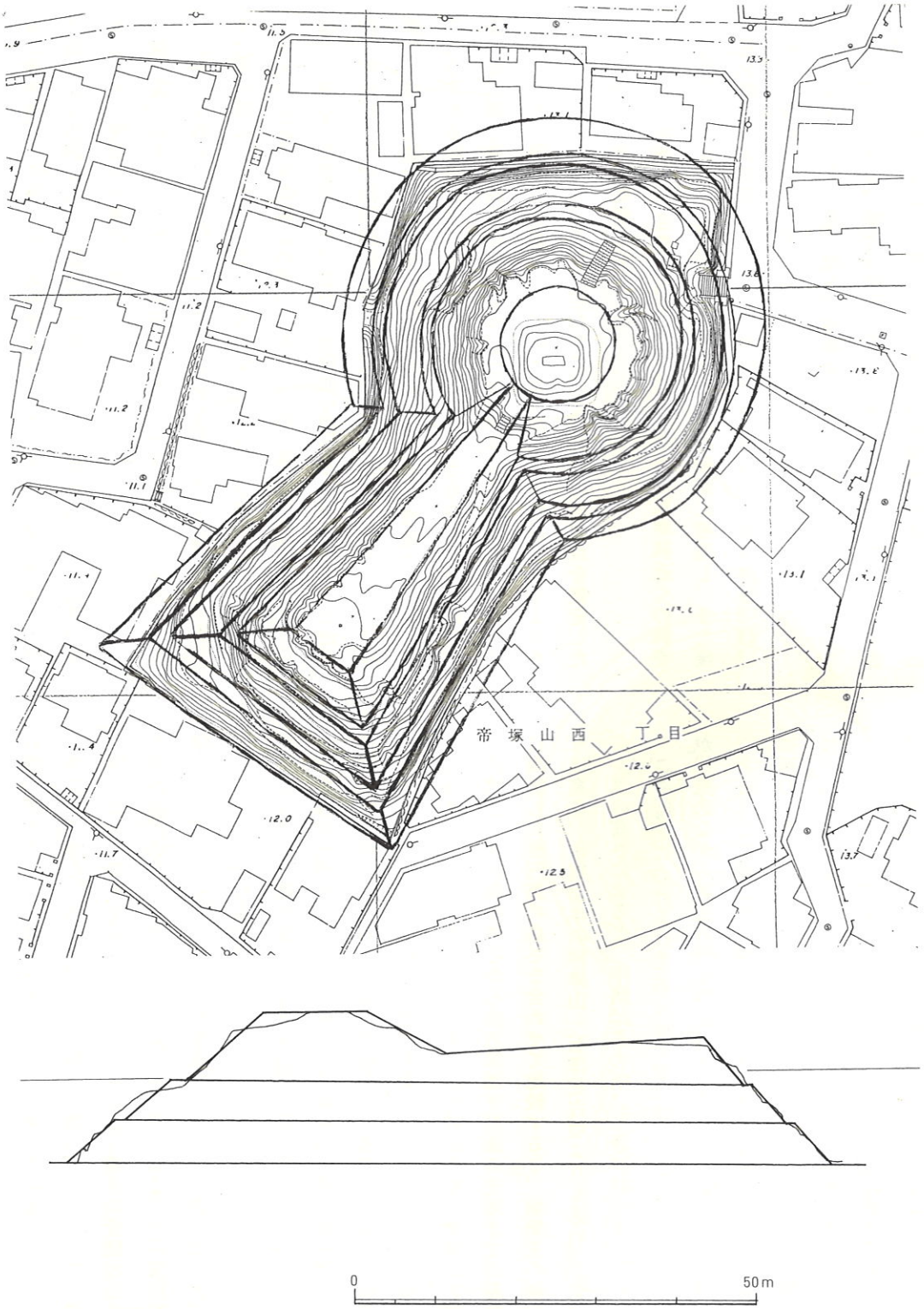


図6　帝塚山古墳の墳丘復元試案　1/800

ると東側面はその後の削り込みが大きく、この点からは、本来のテラス面はより外側にあり、既に失われているとも考えられる。前者で復元したが、後者の可能性も残る。

復元案　以上のことから、帝塚山古墳を三段築成として復元したものが図6である。この際には、前方部の開き具合から中軸線を推定し、また後円部については改変が大きいが、上半部の急傾斜部についてはほぼ正円に近く等高線がめぐっており、これと後円部東側の円弧から、図上で中心点を設定した。また、上位の中段テラス面を標高一七m付近と推定し、また後円部の上段・中段の基底部径については、くびれ部の状況から推定した。後円部の基底部、すなわち墳裾については、これを決める定点はないが、現状の墳丘でもっとも中心からの距離が遠い東北部で半径約三〇mとなる。この規模は、前方部西側において、削り込まれた墳裾の位置を、下位のテラス面から下段斜面を今よりもいくぶん大きくとり、それに照らして、くびれ部の屈曲点を推定した場合の径と大きく齟齬しない。

周囲の発掘調査の成果をあてはめれば、前方部東南隅近くの調査（TZ八六―二次）で検出された斜面は下段の斜面に相当し、また後円部北側（TZ九五―一・二）で検出された後世の土取り跡は、ほぼ墳裾あたりでおさまっている。

この復元にもとづき、墳丘の規模をおよその参考値として示すと、後円部径約五四m、前方部幅約四五m、墳丘長九三mとなる。墳裾部については確かな定点がないので、多少の前後は当然あろうが、数m程度の誤差のうちにはおさまっていると考えている。

さて、こうして復元を試みた帝塚山古墳の墳丘について、畿内の大王墳のなかに類似するものを求めてみよう。墳丘の特徴としては、前方部が後円部よりもまだ低く、前方部の開きはまだ後円部径を越えるほどには広がっていない。三段築成でこうした特徴となると、前期末から中期前半それも前葉までということになる。

そこでまず、後円部に対する前方部の高さを、推定される時期の代表的な前方後円墳と比較してみよう。帝塚山古墳の後円部の本来の高さは不明ながら、石碑のある方形壇を一応基準とすると、前方部はおよそ二m低い。ただし前方部頂の先端は削平されており、本来はいくぶん高まっていたであろう。いま、佐紀陵山古墳・仲津山古墳・石津丘古墳と、後円部の中心から前方部頂平坦面の先端までの距離を同一に調整し、後円部の高さを合わせて比較すると、[30] 前期末の陵山古墳よりは高く、中期前半の仲津山・石津丘古墳よりも低い。したがって、前方部の高さによると、中期はじめ頃に位置づけうる。

この時期における代表的な前方後円墳として津堂城山古墳があるが、残念ながら城山古墳の墳丘は大きく改変され、本来の墳丘は不明である。したがって、城山古墳の相似墳の認定も困難であるが、その候補のひとつである玉丘古墳と比較しよう。[31] まず、玉丘古墳の墳丘長は一〇〇mあまりであり、帝塚山古墳よりもやや大きい。いま、先とおなじようにして縦断面を比較すると、後円部に対する前方部の高さはほぼ共通している。ついで平面形について縦に半裁して比較すると、

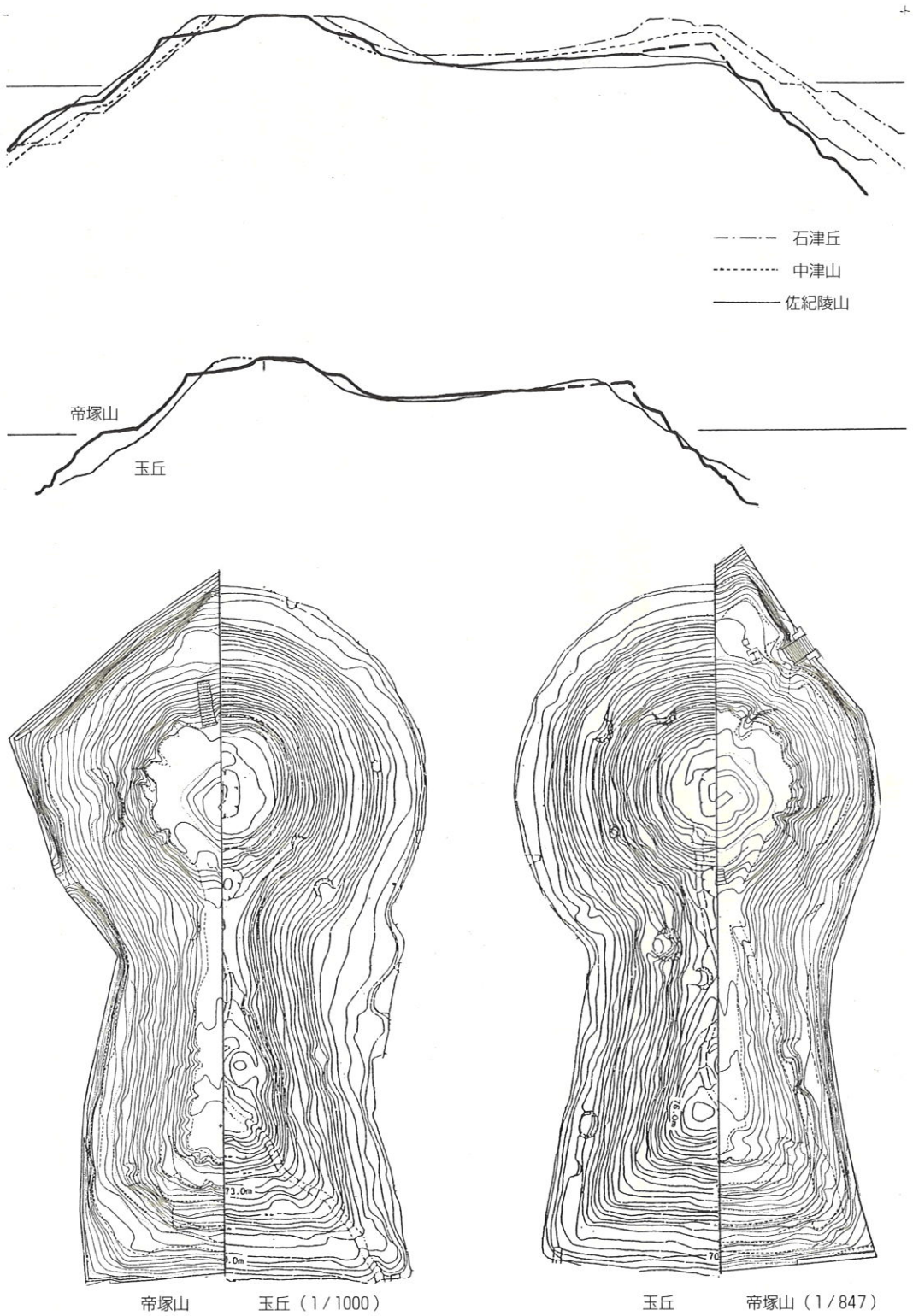


図７　関連諸古墳との比較

くびれ部の位置や前方部の開き具合などは、よく近似している。帝塚山古墳は玉丘古墳に対して八五%として対比しているが、これによると、帝塚山古墳の標高一四m付近の下段テラス面や、標高一七m付近に想定する中段テラス面の位置も、ほぼ一致している。

帝塚山古墳については、これを津堂城山古墳の相似墳とするにはなお検討を要する。玉丘古墳を相似墳と認定してよいかどうかを含めて、津堂城山型がまだ明確に設定できていないためである。また、前期末から中期初頭の時期において、津堂城山古墳以外の別の設計も存在することが予想される。したがって、現段階では帝塚山古墳について津堂城山型との判断は保留するが、前方部の平面形態や縦断面による比較から、帝塚山古墳の墳丘がまだ前方部が発達していない段階の特徴を備えている点は間違いない。

（金谷）

七　おわりに

以上、今回実施した測量調査にもとづき、その所見や埴輪の資料について示し、墳丘の復元を試みた。

帝塚山古墳は墳丘長九三m程度と推定される前方後円墳で、周囲に採土のため掘削した周溝がめぐる。いまだ前方部が後円部よりもある程度低く、また大きく開くものではない。こうした墳丘の特徴からは中期前半までの時期が考えられ、そのなかでも古い特徴をもつ。段築については、三段築成の可能性を考える必要があり、この想定のもとに復元案を示した。

埴輪については、これまでのごく限られた資料に比べると、まとまった内容を提示することができた。しかし、口縁部や透孔などの資料はなく、まだ十分なものではない。概して薄手で褐色に焼き上がり、黒斑はなく、外面はタテハケの一次調整のみで、内面調整としてはケズリやタテハケが認められた。帝塚山古墳の埴輪は、こうした特徴をもつものが大勢を占め、これに窖窯焼成のBc種ヨコハケをもつものがごく少数組み合うようである。その様相には大きな差があるが、古市古墳群や百舌鳥古墳群におけるB種ヨコハケの年代観から、中期中頃ということになる。

したがって、墳丘と埴輪では、そこから導かれる年代に齟齬をきたしている。古墳の一一期区分に照らせば、[32]墳丘からは五期、下っても六期までの形態と考えられるが、埴輪からは七期以降となる。古墳が寿陵とすれば、墳丘の示す時期と埋葬時期とにずれがあることもありうるが、ここではこれ以上の言及はひかえ、今後の検討や調査の進展に委ねたい。埋葬時期は中期中頃で、被葬者の活躍時期は中期前半であったと理解しておくこととする。

帝塚山古墳は単独ではなく、天地堂にあった古墳、字「大帝塚」から想定される古墳、弁天塚古墳などとともに、ひとつの古墳群をなしていた。また、上町台地の縁辺部には、聖天塚をはじめ、かつてはいくつかの古墳が存在していた。内容が判明するものは帝塚山古墳をのぞいてほとんどないが、古墳時代中期以降のものであろう。帝塚山古

墳は上町台地の南端部にあり、南一kmあまりの位置には住吉大社があり、細井川の河口部であったこの付近に住吉津が想定されている。また西縁に立地することが示すように、百舌鳥古墳群とともに、この地域に来航する船舶からの眺望を意識したものと考えられる。

住吉津については、難波堀江の開削により北の難波津の重要性が高まる以前に、国家的な港として重要な役割を果たしていたと推定されている。[33]そして難波堀江が整備されたのは、法円坂の倉庫群のつくられた五世紀後半の頃にはさかのぼるだろうとされている。[34]住吉津について、具体像はほとんどわからず、まして推定されているように難波津が重視される以前、たとえば五世紀前半に港として機能していた証拠はない。近年の発掘調査の成果によると、住吉周辺で集落遺跡が発展するのは難波地域における画期と同じ五世紀後半以降であり、住吉津の成立は難波津をさかのぼらないという。[35]

しかし、帝塚山古墳の存在は、百舌鳥古墳群とともに、五世紀後半以前からこの地域が重要であったことを示しているように思われる。住吉から堺にかけての地域は、上町台地の西縁が直線的で単純な海浜であったと考えられるのに対して、台地は東へ奥まり、細江川や現在大和川の流れる位置にあった河川などが台地を切って流れ込み河口部を形成し、[36]また堺の市街地部分の砂嘴が突き出しラグーンをなすなど、より複雑な地形であった考えられる。五世紀頃の地形の詳細はなお明らかでないが、こうした地形的条件が港湾機能に適していたと思われる。住吉から堺にかけての一帯に想定される港津群の背後には、これに通じる東西の直線道路があった。近世の長尾街道や竹ノ内街道については、『日本書紀』の壬申の乱の記事に見える大津道と丹比道にそれぞれ比定され、[37]またその北の八尾街道は雄略紀に見える磯歯津道ではないかと考えられている。[38]難波大道とよばれる南北道路を含め、こうした計画道路が整備された時期についてはまだ未決着のようであるが、七世紀後半とする見方[39]とともに、近年明らかになった南北溝である長曽根大溝が五世紀後半にさかのぼることから、この時期までさかのぼるという見解もある。[40]

以上のように、帝塚山古墳の評価については、住吉地域の港津機能と結びつけて考える必要があり、その意味では百舌鳥古墳群の意義を考えることにも通じる課題である。さらには古墳時代中期に、大王墳が大和を離れて大阪に営まれることとも無関係ではあるまい。瀬戸内から畿内に入る海上交通の拠点を整え、そこから大和へと通じる陸路を整備することは、この時期の重要な政策であったと考えられるのである。帝塚山古墳の被葬者像として、こうした王権の政策の一端を担い、住吉津において海上交通の実務にあたった有力者ではなかったかと想像されるのである。

（岸本）

（1）堀田啓一「失われた歴史を掘る　大阪の考古学」井上薫編『大阪の歴史』（創元社、一九七九年）、上田宏範ほか「大阪市域の古墳」『新修大阪市史　第一巻』（一九八八年）。

（2）趙哲済「「茶臼山古墳」の発掘調査」（『葦火』四号、（財）大阪市文化

財協会、一九八六年）。

（3）八木久栄「御勝山古墳前方部緊急調査概報」（『難波宮跡研究調査年報一九七四』、難波宮址顕彰会、一九七六年）ほか。

（4）明治二八（一八九五）年の海図には、航海上の目印として、堺市の百舌鳥古墳群中の大仙古墳・石津丘古墳・田出井山古墳とともに、帝塚山古墳も書き込まれている。中井正弘『仁徳陵―この巨大な謎』（創元社、一九九二年）。

（5）梅原末治『大阪府史跡名勝天然紀念物調査報告　第3輯　大阪府下に於ける主要な古墳墓の調査（其一）』（一九三二年）。

（6）今回の測量調査の実施後に、かつて大阪府の事業として測量調査が実施されたことを知った。昭和二〇年代に実施されたこの時の図については未確認である。

（7）堀田啓一「帝塚山古墳とその周辺」（『考古学と地域文化』〈同志社大学考古学シリーズ〉3、一九八七年）。

（8）以下の記述に際しては、梶山彦太郎・市原実『大阪平野のおいたち』（青木書店、一九八六年）を参照した。なお、帝塚山古墳以外の古墳については、堀田啓一「失われた歴史を掘る　大阪の考古学」（前掲）を主とし、上田宏範ほか「大阪市域の古墳」（前掲）ほかを参照し、おおよその地点を落としたものである。

（9）また、図1については、梶山彦太郎・市原実『大阪平野のおいたち』（前掲）に付された河内湖Ⅱ（五世紀代）の地形復元を参考に、当時の景観をイメージするために、仮製二万分の一地形図からその後陸地化した部分を消去したものである。

（10）千田稔「住吉津とその周辺の古代地理」（『古代日本の歴史地理学的研究』、岩波書店、一九九一年）。

（11）堀田啓一「帝塚山古墳とその周辺」（前掲）ほかを参考とした。別表に掲げたもの以外にも文献があるようで、とくに『東成郡誌』として掲げたものは、他書からの引用記事であるようで、かなり詳しい言及のある重要なものであるが、出所部分（括弧内）が空欄で、元の文献がわからない。

（12）『東成郡誌』の引用記事によるとによると、現在の帝塚山古墳の南の字「天地堂」の地に大きな古墳があり、もとは大帝塚であったが、徐々に墳丘が失われて小さくなったと理解されている。これが『住吉村誌』にある運動場として利用されたところに該当するもので、現在住吉中学校となっている地点にあたり、梅原末治の言及するものに当たるだろう。堀田啓一氏が行った小学生の時にここを利用した方の聞き取りでも、古墳の跡地の規模は現在の帝塚山古墳よりも大きく、南向きに近い方向で、前方部と後円部に相当する部分は削平され、くびれ部に相当するあたりの墳丘が残骸となって残っていたということである（堀田啓一「帝塚山古墳とその周辺」、前掲）。これは、梅原による北西に前方部を向ける三〇m弱の前方後円墳との理解とはやや異なっているが、いずれにしても、帝塚山古墳の南に別の古墳が存在したらしいことは確かなようである。

（13）梅原末治『大阪府史跡名勝天然紀念物調査報告　第3輯　大阪府

下に於ける主要な古墳墓の調査（其一）』（前掲）。

(14) 堀田「帝塚山古墳とその周辺」（前掲）。

(15) 官報告示は一九六三（昭和三八）年一〇月一九日である。それ以前の経緯は不明ながら最初は仮指定であり、これが一九六一年に解除されたようである。その後、（財）住吉村常磐会では、周囲との境界を確定の上保護柵もうけるなどの対策を進めることとし、一九六三年一〇月に至って正式に史跡に指定された。現在見るところのコンクリート柵の設置は、一九六三・六四年度に国庫補助事業として実施され、一九六五年三月に完成したものである。『財団法人住吉村常磐会のあゆみ（四）』（一九九三年）

(16) 櫻井久之「付章2　帝塚山古墳調査報告」（『南住吉遺跡発掘調査報告』、（財）大阪市文化財協会、一九九八年）。

(17) 鈴木秀典「黒岩邸建築工事に伴う帝塚山古墳発掘調査略報」『昭和六一年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、一九八八年）。

(18) 櫻井久之「（株）むろみの建設工事に伴う発掘調査略報」（『平成七年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、一九八七年）。

(19) こうした成果を受けて、天野末喜氏は一一期編年の五期に（『古墳時代の研究　第10巻　地域の古墳Ⅰ　西日本』、一九九〇年）、吉村健氏は集成一〇期編年の三・四期に（『前方後円墳集成　近畿編』、一九九二年）位置づけており、前期末から中期初頭とするものが多い。

(20) 上田宏範「大阪の古墳」（『大阪の歴史』第3号、大阪市史編纂所、一九八一年）、前田豊邦「住吉大社と周辺の古墳」（『すみのえ』第一七一号、一九八三年）、上田宏範「大阪市域の古墳」（前掲）。これは一九四三（明治四三）年の『大阪地籍地図（南区及接続町村）』によるものであり、帝塚山古墳付近について、これを集合製図した前田豊邦氏作成の図がわかりやすい（『すみのえ』第一七一号、五五頁）。

(21) 『新修大阪市史』第一巻、第八九図（三七八頁）。なお、地籍図によると、上田・前田両氏が推定する位置の北側、字「大帝塚」の北端部であるが、この部分の形状は前方部を東に向ける前方後円墳らしく見えるが、いかがであろうか。

(22) 国土地理院の水準値と大阪市の水準値では若干の差が生じていることを（財）大阪市文化財協会からご教示いただき、その差の確認を行った。国土地理院の三角点「帝塚山」の水準値は一九・八四mであるが、帝塚山学院の大阪市の水準点「南二五（Ⅱ）」の一二・三二四から三角点まで水準点を移動したところ、水準値は一九・九〇七mとなり、七cm程度の差となった。（財）大阪市文化財協会では、発掘調査において大阪市の水準点を使用し、また後述する帝塚山古墳の調査においても市の測量成果を使っているとのことであり、今回の測量に際しては、大阪市の水準点「南二五（Ⅱ）」を数値を採用した。

(23) この道路地図は基本的に一九七三年の状況を示しており、現況では異なっている部分も多い。とくに、後円部の北の東西道路よりも北側部分は、この頃に宅地造成がなされていたのか空白となっているが、現況は宅地が密集している。また、道路部については一九九三年に修正されているが、一九九五年に後円部北側の建て替えがあり、この時に

道路は拡幅されている。

(24) 道路部以外の部分のつなぎ方については、少ない標高点によっているため問題がないわけではないが、およそのイメージはつかめるものと思う。

(25) 一九二八（昭和三）一〇月に撮影された大阪市域周辺の空中写真である。縮尺は八〇〇〇分の一。ネガはなく焼き付け写真が残る。二〇〇〇年一二月には大阪市の文化財に指定されている。帝塚山古墳が写っているのは整理番号の二三九・二四〇である。この利用については、大阪市教育委員会にご配慮いただき、大阪市計画調整局の許可をえた。

(26) 白色円礫については、西口陽一「石・古墳・淡路」（『考古学研究』第三四巻第二号、一九八七年）を参照した。

(27) これは、二〇〇〇年六月に大阪市教育委員会が実施した中学生を対象とする古墳見学会の際に採集されたものである。

(28) 先に墳丘の項でふれたように、昭和のはじめに本来の位置を保つとみられる円筒埴輪が観察され、その位置が測量図に図示されており、帝塚山学院の波々伯部守氏によると、生徒がその付近を探索して見つけたものという。

(29) 一瀬和夫「古市古墳群における埴輪群の変遷」（『究班』〈埋蔵文化財研究会一五周年記念論文集〉、一九九二年）。

(30) 帝塚山古墳の後円部について本来の高さは明らかでないが、土壇の周囲の平坦面は削平され本来よりも低いことは確かであり、ここでは土壇上面で一応合わせることとした。

(31) 岸本直文「畿内大形前方後円墳の築造規格の再検討」（『人文研究』第五二巻第二分冊、二〇〇〇年）。玉丘古墳の測量図は、岸本道昭「前方後円墳からみた政治構造」（『第一回播磨考古学研究集会「前方後円墳からみた播磨」資料集』、二〇〇一年）。

(32) 和田晴吾「古墳時代の時期区分をめぐって」（『考古学研究』第三四巻第二号、一九八七年）。

(33) 直木孝次郎「難波津と難波の堀江」（『難波宮と難波津の研究』、吉川弘文館、一九九四年）。

(34) 積山洋「上町台地の北と南―難波地域における古墳時代の集落変遷―」（『大阪市文化財論集』、一九九四年）。

(35) 積山洋「上町台地の北と南」（前掲）。

(36) 日下雅義「古代の〈住吉津〉について」

(37) 岸俊男「古道の歴史」（『古代の日本 5 近畿』、角川書店、一九七〇年）。

(38) 服部昌之『律令国家の歴史地理学的研究』（大明堂、一九八三年）。

(39) 木原克司「摂津・河内の条里地割施行と直線古道」（『大阪市文化財論集』、一九九四年）。

(40) 森村健一「五世紀後半成立の古代道と長曽根大溝」（『堺市文化財調査概要報告』第八九冊、二〇〇〇年）。

〔付記〕校正中、堅田直氏から、大演習を記念して明治三六年に石碑を建立した工事の際に、埋葬施設に到達したらしく、出土した朱塊があり、これを見たという情報を提供いただいた。